



小説・経済学

なん じょう のり お

南条 範夫

山口市
(1908～2004)



提供・古賀正子

【著作】

- 『燈台鬼』（昭和31・河出書房）
『暁の群像 豪商 岩崎弥太郎の生涯』（昭和39・講談社）
『細香日記』（昭和56・講談社）
ほか

【閲覧情報】

萩市立萩図書館 ☎083812516355



萩の城下町

エッセイ 「萩と云う町」

萩に触れないで維新を語ることは不可能であろうし、維新に関連なく萩を語ることも不可能である。この山陰の小さな町こそは、近代日本がその誕生の際に産湯をつかった土地であり、明治維新のふるさとである。

萩のデルタは三百七十年前までは、単なる湿地帯であった。これが城下町となったのは、毛利氏が関ヶ原役に敗れて中国八州百三十万石から防長三十六万石に削減されて、ここに築城した毛利輝元の時代からだ。それ以来二百数十年に亘ってこの町には徳川幕府に對する已み難い怨恨が鬱屈していたらしい。

その鬱積したエネルギーが突然、火を噴いて炸裂し、討幕の火蓋を切ったのが明治維新の転点となった。（略）

（婦人画報 昭和47年3月号より）

南条 範夫

年譜

明治41（一九〇八）	
大正5（一九一六）	八歳
大正9（一九二〇）	一二歳
大正13（一九二四）	一六歳
昭和2（一九二七）	一九歳
昭和8（一九三三）	二五歳
昭和10（一九三五）	二七歳
昭和11（一九三六）	二八歳
昭和18（一九四三）	三五歳
昭和19（一九四四）	三六歳
昭和24（一九四九）	四一歳
昭和26（一九五二）	四三歳
昭和27（一九五二）	四四歳
昭和28（一九五三）	四五歳
昭和30（一九五五）	四七歳
昭和31（一九五六）	四八歳
昭和32（一九五七）	四九歳
昭和34（一九五九）	五一歳
昭和50（一九七五）	六七歳
昭和57（一九八二）	七四歳
平成16（二〇〇四）	九五歳

南条範夫（本名・古賀英正）は、明治四十一年（一九〇八）十一月十四日、東京・銀座に生まれた。大正五年（一九一六）、税関の眼科医であった父が中国の青島に転勤したのに伴い、青島日本人学校に転入した。大正十三年（一九二四）、旧制山口高校に進み、昭和二年（一九二七）、東京帝国大学法学部に、さらに経済学部でも学び、昭和八年（一九三三）に卒業、経済学部の助手となった。しかし、時勢は学究に沿わず、昭和十一年満鉄調査部、次いで日本出版文化協会に移った。昭和十八年（一九四三）、軍属として中国・上海で経済工作に当たり翌年辛くも帰国した。戦後、國學院大學と中央大学の教授を兼任し、「金融論」「銀行論」「貨幣論」などを講じた。

小説は余技であったが、雑誌に応募した作品『出べそ物語』『子守の殿』『あやつり組由来記』などが次々に入選し、昭和三十一年（一九五六）『燈台鬼』が第三十五回直木賞を受けると、大衆文学に新分野を開拓したと評価され、原稿依頼が相次いだ。以降、学者と作家を両立させることになった。

人間の内面に迫る意欲的な作品を次々に発表し、昭和三十年代、『残酷物語』等で、『残酷ブーム』を巻き起こし、また『無頼武士道』など一連の時代小説では、五味康祐、柴田錬三郎とともに、『剣豪小説ブーム』を作った。更に『細香日記』『五代將軍』などの伝記的歴史小説は、独特の視点と表現で読者を魅了した。

尾崎秀樹は「南条範夫の登場は、大衆文学の現代化に先鞭をつけるものであり、出世作『燈台鬼』の残酷なリアリズムと作品の現代性が、南条文学の二つの函数をなす」と評している。

南条は多感な青春期を山口で過ごしたことが、歴史作家への心象的出発点であり、また戦争時に触れた普通の人間の内奥の残酷性も作品構成の根底にあると語っている。

南条は『高杉晋作』など長州モノを含め膨大な数の作品を書いたが、日本文芸家協会が推奨する代表作時代小説に、昭和三十二年（一九五七）から平成十四年（二〇〇二）まで、四十五年間毎年推奨されたことは稀有なことである。『大衆文壇の巨匠』と称された所以でもある。

平成十六年（二〇〇四）十月三十日、永眠した。

（文・高木正熙）



旧制山口高校時代（昭和2年）



ある日の南条夫妻（昭和42年）

（提供・古賀正子）

『代表作時代小説』収録作品一覧

- 『燈台鬼』（昭31）『鉄砲商人』（昭32）
『材木商人』（昭33）『復讐鬼』（昭34）
『御用商人』（昭35）『六弥太の報酬』（昭36）
『傷痕』（昭37）『女人と人形』（昭38）
『石垣の中の二人』（昭39）
『発端』（昭40）
『陰謀の人』（昭41）
『衆道伝来記』（昭42）
『梟し首と髯』（昭43）
『剣獣』（昭44）
『柙打武左衛門』（昭45）
『河内介の切腹』（昭46）
『負け犬二匹』（昭47）
『孫太郎漂流記』（昭48）
『戦国とりかえはや物語』（昭49）
『不肖の弟子』（昭50）
『葉桜の蔭に』（昭51）
『くも姫伝説』（昭52）
『広重描く赤坂』（昭53）
『この人とおの方』（昭54）
『脱走』（昭55）
『汚れた時間から来た手紙』（昭56）
『双生児の夢入り』（昭58）
『江戸のゴリヤードキン氏』（昭59）
『疑惑の眼』（昭60）
『兄の蔭』（昭61）
『行かないで』（昭62）
『ただ一度、一度だけ』（昭63）
『ただ一つの真実』（平成元）
『再び消えた一刀斎』（平成2）
『公方さまの嫁姑』（平成3）
『束の間の恋ころ』（平成4）
『笠原騒動』（平成5）
『女傑への出発』（平成6）
『元亀元年の信長』（平成7）
『吉川治郎少輔元春』（平成8）
『ねじれ弾正、鬼弾正』（平成9）
『密林の中のハンギ』（平成10）
『娘の道三』（平成11）
『お蘭さまと二十郎』（平成12）
『義仲の最期』（平成13）
『備後の量』（平成14）
『乱世』（平成17）

南条 範夫